

經つくゑ

樋口一葉

青空文庫

哀れ手向の花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに操の身はひとり住、あた
 ら美形を月花にそむけて、世は何時ぞとも知らず顔に、繰るや珠數の緒の引かれては御
 佛輪廻にまよひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、なにと盟ひて比翼の鳥の片羽をうら
 み、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閑窓のうち机上の香爐に絶えぬ烟りの主は
 と問へば、答へはぼろり襦袢の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かく
 すに顯はるゝが世の常ぞかし。

さすれば夢のあともなけれど、悟らぬ先の誰れも誰れも思ひを寄せしは名か其人か、醫
 くわだいがく 科大學の評判 男に松島忠雄と呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髮
 の薔薇の花やがて笑みを作り、首卷のはんけち俄かに影を消して、途上の黙禮とも
 千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵の思ひをさせて我が賀がねにと夫
 れも道理なり、故郷は静岡の流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、
 才あり學あり天晴れの人物、今こそ内科の助手といへども行末の望みは十指のさ

ところ
 處なるを、これほどの人他人に取られて成るまじとの意氣ごみにて、智さま拂底の世
 中なればにや華族の姫君、高等官の令嬢、大商人の持參金つきなど彼れ
 よ是れよと申込みの口 《くち／＼》より、小町が色を銜らふ島田鬻の寫眞鏡、
 式部が才にほこる英文和譯、つんで机上にうづたかけれども此男なんの望み有りて
 か有らずか、仲間が百さへづり聞ながしにして夫れなりけりとは不審しからずや、うた
 がひは懸かる柳闇花明の里の夕べ、うかる、先きの有りやと見れど品行方正の受
 けあいてをう
 合人多ければ事はいよいよ闇黒になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立
 ちよそ
 寄る某れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轆棒おろさぬ事なしと口さがなき車夫の誰
 れに申せしやら、某から某と傳はりて想像のかたまりは影となり形となり種々の噂
 となり、人知れず氣をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性のあるお人しの
 びやかに跡をやつけ給ひし、探ぐりに探ぐれば扱も燈臺のもと暗らさよ、本郷の森
 はちよう
 川町とかや神社のうしろ新坂通りに幾構への生垣ゆひ廻せし中、押せば開ら
 く片折戸に香月そのと女名まへの表札かけて折々もる、琴のしのび音、軒端
 の梅に鶯はづかしき美音をば春の月夜のおぼろげに聞けばかり、ちらり姿は夏の簾ごし憎
 くや誰れゆゑ惜しみてか薬師さまの御縁日にそゞろあるきをするでもなく、人まち顔の

立姿たちすがたかどに拜おがみし事こともなければ美人びじんと言いふ名なこの近傍かいわいにかくれなしと聞きくは、扱さてこ
 そ彌々いよく學士がくしの外かこい妾めかけか、よしや令嬢れいちようぶればとてお里さとはいづれ知しれたもの、其様そのんなもの
 に鼻毛はなげよまれて果はては跡あとあしの砂すなの御用心ごようじんさりとてはお笑しょうし止しやなど、憎にくくまれ口くちいひち
 らせど眞しんの處ところは妬ねたし妬ねたしの積つもり、かゝる人々ひと々の瞋恚しんいのほむらが火柱ひばしらなど、立昇たちほつ
 て罪つみもない世せ上じやうをおどろかすなるべし。

二

黒ぬり塀べいの表おもてかまへとお勝手かつて手むきの經濟けいざいは別べつものぞかし、推をしはかりに人ひとの上うへは羨うらやまぬ
 物ものよ、香月かうつき左門さもんといひし舊幕臣きうばくしん、彼かの學士がくしの父ちち親おやとはかみしもの肩かたをならべし間あいだなる
 が、維新いしんの變へんに彼かれは靜岡しづをかのお供とも、これは東臺とうだいの五月雨さみだれにながす血汐ちしほの赤あかき心こころを首尾しゆび
 よく顯あらはして露つゆとや消きえし、水みづさかづきして別わかれし限ぎりの妻つまへ形見かたみが此美人このびじんなり、人ひと
 不幸ふこうは生うまながらに後家ごけさまの親おやを持ちもちて、すがる乳房ちぶさの甘あまへながらも父ちちといふ味夢あぢゆめに
 も知しらず、物ものごゝろ知しるにつけて親おやといへば二人ふたりある他人ひとのさまの羨うらやましさに、いとしき
 事こととひかけては幾度母いくたびは、そでの袖そでしぼらせしが、その母はにも又また十四またといふとし果敢はかなく別わかれて

今いまは身み一つひとつのいたはしき、かの學士がくしどの其その病びやう床しょうに不圖ふとまねかれて盡じんり力りよくしたるが
 原因もととなり、くり返かへす昔むかしのゆかりも捨すてがたく、引ひつゞいて行ゆき通かひしけるが、見みるにも
 聞きくにも可か愛あい想さうなり氣きのどくなり、これが若もしもお使きん娘むすめの飛とびかへりなどならば知しら
 ぬ事こと、世よといはゞ門かどの戸との外ほかをも見みず、母はさまとならではお湯ゆにも行ゆかじ、觀かん音のんさまの
 お參まゐりもいやよ、芝居しばゐも花見はなみも母はさま御ご一處しよならではと此この一ひともとのかげに隠かかれて、姿なり
 こそ嶋田しまだの大人をとづくらせたれど正しょうの處ところは人にん形ぎやうだいて遊あそびたきほどの嬰ね兒ごさまが俄にはかに
 落おちし木きの下したの猿さる同どうやう、涙なみだのほかに何なんの考かんがへもなくお民たみと呼よぶ老は婢しための袖そでにすがつて、私わた
 しも一處しよに棺かんに入れよとて聞ききわけもなく泣なき入りし姿すがたのあくまであどけなきが不ふ愜びんにて、
 素もとより誰たれたのまねば義務ぎむといふ筋すぢもなく、恩おんをきせての野や心しんもなければ夫それより以い來らいの
 百ひやく事じ萬端ばんたん、身みに引ひうけて世話せわをすること眞しんの兄けう弟だいも出で來きぬ業わざなり、これを色眼鏡いろめがね
 の世よの人ひとにはほろ酔よひの膝ひざまくらに耳みみの垢あかでも取とらせらる處ところが見みゆるやら、さりとは學士がくしさま
 冤罪ゑんざいの訴うつた
 冤罪ゑんざいの訴うつたころもなし。
 今いまの世よの女子ぢよし教きやう育いくを賛さん成せいといひがたき心こころよりお園そのにも學がく校かうがよひ爲なせたくなく、
 廻まわり路みちでもなき歸宅かへりがけの一時じかん間かんを此家このに寄よりては讀どく書しよ算さん術じゆつ、思おもふやうに教をしへて見み
 れば記憶きおくもよく分わかりも早はやく、學士がくしはいよく可かわい愛あいがりしが、お園そのすこしの感かんじもなく、有あり

がたし嬉しなど口の先に出すどころか顔を見るさへ嫌やがりて、日 《にちくく》の稽古
 にも書物の事より外に問ふことの無きは勿論、返來をさへ打とけて言ひし事はなく、
 強て問へば泣き出しさうな景色を見るお民きの毒さかぎりなく、何歳までも嬰兒さまで致
 しかたが御座りませぬ、流石に氣のおけるお他人には少し大人らしくお成り遊ばせど、お
 こゝろやす心 安だての我まゝか、甘へ氣味であの通りの御遠慮なさ、ちと御呵り遊ばして下さ
 りませと極り文句に花を持たすれど學士は更に氣にも止めず、その幼なきが尊ときなり、
 反對に跳かへられなばお民どのにも療治が六ツかしからん、園さま我れに遠慮は入
 らず、嫌やな時は嫌やといふがよし、我れを他人の男と思はず 母 様同やう甘へ給へと優
 しく慰さめて日毎に通へば、なほさら五月蠅く厭はしく車のおとの門に止るを何よりも氣
 にして、それお出と聞がいなや、勝手もとの箒に手拭をかぶらせぬ。

三

お民は此家に十年あまり奉公して主人といへど今は我が子に替らず、何とぞ此人を
 立派に仕あげて我れも世間に誇りたき願ひより、やきもきと氣を揉むほど 何 心なきお

園そのていの体ていのもどかしく、どうした物ものと考かんがへ、困こまつたものと歎なげき、はては意見いけんに小言こごとを交ませて
 或ある日ひさまさま言いひ聞きかせぬ。

何時いつかは言いはふと存ぞんじたれど、お前まへさまといふ御人おひとには呆あきれまする、是これが五いつつや十とをの子こ

供どもではなし、十六といへばお子様こさまもつ人もありますぞや、まあ考かんがへて御覽ごらんなされお母様ははさま

がお病なくなり沒なかりから此このかた、足あしかけ三年ねんの長ながの間に松島まつしまさまが何どれほど盡つくして下くだされたと思おぼ

しめす、私わたしでさへ涙なみだがこぼれるほど嬉うれしきにお前まへさまは木きか石いしか、さりとは不ふ人情にんじようと

申まへものなり、お覺おぼえがある筈はずなれど一々申まへさねばお分わかりになるまじ、お身みよ寄より便たよりのなき

お前まへさまの身みを案あんじて、人ひとは教をしへが肝かん賢じんのものなるに言いはゞ園そのさまなどは今いまが白はく糸し、何なん

の色いろにも染そまりやすければ、學がく校かうかよひに宜よからぬ友ともでも出で來きてはならず、一さい切いわれに

任まかせてまあ見みて居いてくれと親しん切せつに仰おつしやつてお師し、よう匠しやうさまから毎まい日にちのお出で稽げい古こ、月げ

謝つしやを出だして附つけ届とどけして御馳走ごちそうして車くるまを出だして、あがめ奉たてまつる先せん生せいでも雪ゆきや雨あめには勿もちろ

論んの事こと、三度さんどに一度いどはお断ことわりが常つねのものなり、それを何なんぞや駄だ々々つ子こ様さまの御機嫌ごきげんとリ／

＼、此この本ほん一冊いっさつよみ終おはらば御褒美ごほうびには何なにを參まらせん、手てならひが能よく出で來きたれば此この次つぎ

には文ふみを書かき見みせ給たまへと勿もつ体たいない奉ほう書しよの繪半切ゑはんきれを手遊おもちやに下くだされた事こと忘わすれはな

さるまい、斯かう申まへさばお前まへさまのお心こころには何なんの彼あんな物ものたゞきつけて返かへしたしと思おぼしめす

知らねど、紙一枚にも眞實のこもるお志しを頂く物ぞかし、其御恩を何とも思はず、
 一年といふ三百六十五日打通して、好い顔どころか普通あたりまへの暑い寒いも満足には仰
 しやらず、必ひつきよう竟あの方なればこそお腹もたてず氣にも懸けず可愛がつて下さるもの、
 第一天道さまの罰が當らずには居りませぬ、昨日も此近傍の噂を聞けば松島さまは
 世間で評判の方、奥さま持たうなら撰り取り見どりに山ほどなれど何方もお断りで此
 方へのお出は嬢様ぢようさまの上にはばかり日の照りが違うか、何といふお幸福しやわせと焼もちやいて
 羨みますぞや、そのお人に捨てられたらお前さまあ何と遊ばず、お泣きなさるはお腹が
 たつか、お怒りになつてもよし、民は申だけは申ます、悪くお聞き遊ばせば夫れまで、
 さりとは方圖のなきお我ま、と思ひ切つて呵りつけしが是れも主思ひの一部なり、もとよ
 りお園に悪る氣のあるではなく唯おさな子の人ぎらひして、抱かれるを嫌やがり、あやさ
 れ、ば泣くと同じく、何故か其人そのひとに氣が合はず去りとして格別に仇あだをして困らせんなど
 、念の入りし憎くさでもなく、まこと世間見ずの我ま、から起りし處爲なれば、言はれる
 につけて何と言譯の理由もなく、口惜しきか悲しきか恥かしきか無茶苦茶に泣いて顔も
 あげぬを、お民なほも何事をかいはんとする折門にとまる例の車の音、それお出なり今
 日こそはお優しく遊ばせよ。

四

その園さまはどうなされた今日けふはまだ顔かほが見えぬと問とはれてまさかに、今いままでこれこれで次つぎの
 間に泣ないて居おられますとも言いひがたければ、少せう々御ご不ふ加か※げんで、然しかしもう宜よろしう御ご座ざりま
 せうほどに、まあお茶ちやを一つなど、民たみは其場たみをつくるひぬ。
 學士がくし眉まゆを皺しはめて夫それは困こまつたもの、全ぜん体たいが健じ康ようといふ質たちでなければ時じ候こうの替かり目めなど
 は殊ことさら注意ちういせねば悪わるし、お民たみどの不ふ養やう生じやうをさせ給たまふな、さてと我われも急きうに白しら羽はの矢や
 が立たちて、遠ゑん方ほうへ左さ遷せんと事ことが極きまり今日けふは御ご風ふう聽てうながらの御ご告いとまごひ 別わかなりと譯わけもなく
 いへばお民たみあきれて、御ご申しん談だんをおつしやりますな、いや 申しん 談だんではなし 札さつ幌ぼろの病びよう
 院ゐん 長ちやうに任にんじられて都合つがふ次第しだい明日あすにも 出しゆつたつ 立たせねばならず、尤もつとも突だし然しといふではな
 く斯かうとは大たい底ていしれて居おりしが、何なにか驚おどろかせるが苦くるしさに結つ局まりいはねばならぬ事ことを今け
 日ふまでも黙だまつて居おりしなり、三年ねんか五年ねんで歸かへるつもりなれども其そのほどは如何どうか分わからねばま
 づ當たう分ぶんお別わかれの覺かく悟ご、それにつけても案あんじられるは園その様さまのこと、何なんの余よ計けいの世せ話わなが
 ら何な故げか最は初じめから可かわ愛あくて眞しん實じつの處ところ一日いち見みぬも氣きになる位くらいなれど、さりとして何いつ時とき來きても喜よろこ

ばれるでもなく、結局あれほど厭やがるものを氣の毒など氣のつかぬでもなければ、如何
 かして天晴れの淑女に育て、見たく、自惚れの言ひ分と笑ひ給はんが兎に角今日まで嫌や
 がられに來しなり、まづ學問といふた處が女は大底あんなもの、理化學政法など、
 延びられては、お嫁さまの口にいよく遠ざかるべし、第一皮相の學問は枯木に造り花
 したも同じにて眞心の人は悦はぬもの、よしや深山がくれでも天眞の花の色は都人
 を床しがらする道理なれば、此うへは優美の性をやしなつて徳をみがく様に教へ給へ、我
 れ此地に居たりとて根からさつぱり談合の膝にも成るまじきが、これからはいよくお
 民どの大役なり、前門の虎、後門の狼、右にも左にも怕らしき奴の多き世の中、あ
 たら美玉につけ給ふは、園さまにも言ひきかせたきこと多くあれど我が口よりは
 ゝ又耳に兩手なるべし、不思議に縁のない人に縁があるか馬鹿らしきほど置いてゆくが
 嫌やな氣持と、笑つてのけながら調子がいつもほど冴えては聞えず。
 散々のお民が異見に少し我が非を知り初し揚句、その人は俄かに別れといふ、幼なき
 心には我が失禮の我まゝを憎くみて夫故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、侘が
 したれけれど障子一重を出る時機がなく、お民が最初に呼んで呉れし時すこしひねくれ
 てより拍子ぬけがして今更には馳け出しもされず、其うちにお歸りにならば何とせん、

もう逢つては下さらぬかなど、敷居の際にすり寄つてお園の泣けるも知らず、學士はその時つと起つて、今日はお名残なるに切めては笑ひ顔でも見せて給はれとさり障子を明ければ、お、此處にか。

五

左様ないてくれては困る、お民どのも同じやうに何の事ぞ、もう逢はれぬと言ふでもなきに心細き事いひ給ふな、園さま何も詫びらるゝ事はなし、お前さまの事は宜しくお民が承知して居れば少しも心配の事はあらず、唯これまでと違ひて段々と大人になり世間の交際も知らねばならず、第一に六づかしきは人の機嫌なり、さりとして諂ひの草履とりも餘りほめた話してはなけれど、處が工合ものにて、清淨なり無垢なり潔白なりのお前様などが、右をむくとも左を向くとも憎くむ人は無き筈なれど夫れでは世が渡られず、我れも矢張り其中間の一枚板にて使ひ道が不向きなれども流石に年の功といふものか少しはお前さまより人が悪るし、さりとして悪るく成り過ぎては困れど過不及の取かぢは心一つよく考へて應用なされ、實の處出立は明後日、支度も大方出來た

れば最早お目にかゝるまじく随分身軀をいとひて煩ひ給ふな、此上にお頼みは萬々見送りなどして下さるな、さらでだに泣き男の我れ朋友の手前もあるに何かをかしく察られてもお互に詰らず、さりながらお寫眞あらば一枚形見に頂きたし此次出京する頃には最はや立派の奥様かも知れず、それでも又逢つて給はるか顔をのぞけば、膝に泣き伏して正体もなし、夫れほど別れるがお嫌やかと背を撫せられて黙頭づく可愛さ、三年目の今日今さらに寧いつもの愁らきが増しなり。

柔かき人ほど氣はつよく學士人々の涙の雨に路どめもされず、今宵は切めてと取らへる袂を優しく振切つて我家へ歸れば、お民手の物を取られしほど力を落して、よしや千里が萬里はなれるとも眞實の親子兄弟ならば何時歸つて何うといふ樂しみもあれど、ほんの親切といふ一筋の糸にかゝつて居し身なれば、遠ぎかるが最期もう縁の切れしも同じこと取りつく島の頼みもなしと、我れ振りすてられしやうな歎きにお園いよく心細く、母親の別れに悲しき事を知り盡して腸もみ切るほど泣きに泣きしが今日の思ひは夫れとも變りて、親切勿体なし、残念などいふ感念が右往左往に胸の中を掻き廻して何が何やら夢の心地、さりとて其夜は寐らるゝところならず、強ひて床へは入りしもの、寐間着も着かへず横にもならず、さてつく／＼と考へれば目の前に晝間の様々

が浮かびて、我れは知らねど胸にや刻まれし學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際は此袖をかく捉らへて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし被のお聲も最う聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、思へば何故に彼の人のあの様に嫌やなりしかと長き袂を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八ツ口ころくと洩れて燈下に耀やく黄金の指輪、學士が左の藥指に先のほどまで光りしものなり。

六

苔みと思ひし梢の花も春雨一夜だしぬけにこれはこれと驚かる、物なり、時機といふもの、可笑しさにはお園の少さき胸に何を感じしか、學士が出立後の一日二日より爲る處業どころなく大人びて今までの様に我ま、も言はず、縫はり仕事よみ書の外、以前に増して身をつ、しみ誘ふ人ありとも人寄せ芝居の浮きし事に足も向けねば、折ふしは遂ひに今まで見し事もなき日本全圖など、いふ物をお民がお使ひの留問の間に繰り開けて居る事もあり、新聞紙の上にも札幌とか北海道とか言ふ文字には逸はやく目のつく様子、或日お民氣が付いて見れば右の指にありくと耀やくものあり。

されても秋風の桐の葉は人の身か、知らねばこそあれ雪佛の堂塔いかめしく造らん
 とか立派にせんとか、あはれ草臥もうけに成るが多し、文化とか開明とかの餘光
 に何事も根から葉から堀かへして百年千年むかしの人の心の中まで解剖する世に、こ
 れを職掌の醫道の妙にも我が天授の齡は何うもならず、學士札幌へ趣きし歳の
 秋、診察せし窒扶斯患者に感染して、惜しや三十路にたらぬ若さかりを北海道の
 土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心。
 空蟬の世の中すて、思へば黒染に袖の色かへるまでもなく、花もなし紅葉もなし、丈
 にあまる黒髪きり拂へばとて夫れは見る目の菩提心、人前づくりの後家さまが處爲
 ぞかし、うき世の飾りの紅をしらいこそ入らぬ物と洗ひ髪の投げ島田に元結一筋きつて
 放せし姿、色このむ者の目には又一段の美とたゝえて智にゆかん嫁にとらん、家名相續
 は何ともすべしと言ひ寄る人一人二人ならず、ある時學士が親友なりし某、當時醫學部
 に有名の教授どの人をもつて法の如く言ひ込みしを、お民上もなき縁と喜びてお前さ
 まも今が花のさかり散りがたに成つては呼んで歩行とも賣れる事でなし、大底にお心を
 定め給へ、松島さまに恩はありとも何のお束約がありしでもなく、よし有りたりとも
 再縁する人さへ世には多し、何處へ憚かりのある事ならねばとて説諭せしに、お園にこ

やかに笑ひて口先の約束は解くにとかれもせん、眞の愛なき契りは捨て、再縁する
 人も有べし、素より彼の人に約束の覚えなく増して操の立てやうもなけれど、何處とも
 知らず染みたる思ひは此身ある限り忘れ難ければ、萬一かの教授さま達て妻にと仰せの
 あらば、形だけは参りもせん心は容易くたてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて聞
 きいれる景色のなきに、お民いひ甲斐なしと斷念して夫れよりは又進めずとぞ、
 机の由縁かくの如し。
 或る口の悪るきお人これを聞きて、扱もひねくれし女かな、今もし學士が世にありて札
 幌にもゆかず以前の通り生やさしく出入りをなさば、虫づのはしるほど嫌やがる事うた
 がひなしと苦笑ひして仰せられしが『ある時はありのすさびに憎くかりき、無くてぞ人
 は戀しかりける』とにも角にも意地わるの世や意地悪るの世や。

をばり

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部 第六編」

1895（明治28）年6月20日

初出：「甲陽新報」

1892（明治25）年10月18日～25日

※初出時の署名は、「春日野しか子」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「ヰ」と「ヱ」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

経つくゑ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>